

われる行事や信仰を理解することができないばかりか、これに関する簡単な質問にもこたえられない」ことをあげている。そして、民俗学との協業をすればこうした難点は突破できるのであり、また僧侶が民俗学を応用し「教化対象たる常民の心意をしっかりとぎって布教伝道に活用するならば、護教的精神もまたみだされる」と論じている。こうした仏教(史)学に民俗学を応用することの意義は、例えば浄土宗僧侶の竹田聰洲もまた説いているが、その背景には、当時の民俗学の実践性／社会参加志向の強さというのがあるだろう。「国家神道」なき後の「日本国民の教師」たらんとした柳田の「新国学」にせよ、村落社会に関する知見を活用した民法改正への関与にせよ、民俗学者の社会科学教育への接近にせよ、その裏には、国民の日常的な信仰や文化を反省的に理解するために有用な民俗学という新興の学問が、学界も含めた様々な社会領域に進出していくとする意欲が見て取れる。仏教民俗学もまた、そうした潮流の中で誕生した学的実践であった。

この様な発生の由来をもつ五来(ごらい)の学問は、民衆(みんしゆ)仏教の歴史復元に邁進し、教理の展開よりも庶民救済の諸相をこそ追及した知見を膨大に積み重ねていった。そこで表象された仏教史は、民衆(みんしゆ)仏教による一元論的な救済史観とでも評すべきイメージに満ちており、それは例えば、親鸞(おんろう)のような鎌倉(かまくら)仏教者の民衆性を強調する論者(ふくろ)之(これ)総(すべ)など)とも、近世(きんせい)民衆(みんしゆ)の中に生きた信仰を見る諸研究とも異なっており、古代(こくたい)から現代(げんたい)までの全歴史(ぜんれきし)を貫く民衆(みんしゆ)の主体的(ていし体的)な仏教創造(ぶつこうぞう)とその後の教理(きょうり)の付着(つちやく)や制度化(せいどくわ)による墮落(だらく)を語るものであった。

パネルの主旨とまとめ

オリオン・クラウタウ

クラウタウ報告でも触れられたように、本パネルセッションは、敗戦(ばいせん)という体験(たいけん)の後に「日本(にっぽん)仏教(ぶつこう)」の語り直しを試みた研究者(けんぎゆ)たちに焦点(てんてん)を当てることで、「日本(にっぽん)仏教(ぶつこう)」概念(がい念)の再構築(さいこうしゆ)と戦後(せんご)日本(にっぽん)における思想(しゆしゆ)空間(くわん)の更なる理解(りかい)を目指す論文集(ろんもんしゆ)『戦後(せんご)歴史(れきし)学(がく)と日本(にっぽん)仏教(ぶつこう)』(仮題(かりだい))の出版(しゆつ)企画(けいかく)の一環(いつわん)として行われたものである。編者(へんしや)のクラウタウによる全体的(ぜんてい)なイントロダクション(しゆん)に続き、各発表者(かくはつぷしや)は、歴史(れきし)学(がく)・社会学(しやうがく)の分野(ぶんぎや)で活躍(かくやく)した服部(はつべ)之(これ)総(すべ)、**「葬式(そうしき)仏教(ぶつこう)」**というタームの鑄造(ちゆうぞう)で知られる圭室(けいむち)諦成(ていせい)、伝統的(でんてん)な**「仏教(ぶつこう)学(がく)」**の限界(げんがい)を感じ、**「仏教(ぶつこう)民俗学(みんしゆがく)」**の確立(たつり)に尽力(じんりき)した五来重(ごらいぢゆう)を取り上げた。これらの報告(ほうこく)に対し、東北(とうほく)大学(だいがく)教授(けうじゆ)の佐藤(さとう)弘夫(ひろお)から次のようなコメント(コメント)が提示(ていし)された。

戦後(せんご)日本(にっぽん)アカデミズム(アカデミズム)は、日本(にっぽん)社会(しやかい)における「封建的(てんけんてき)な性格(せうかく)を徹底的(てつてい)に批判(ひはん)すること(こと)で自己(じこ)形成(けいせい)を図(はか)った(た)のであり、日本(にっぽん)仏教(ぶつこう)研究者(けんぎゆ)は、近代(きんたい)の可能性(かんのせい)を「**仏教(ぶつこう)**」と「**民衆(みんしゆ)**」との親近性(しんしんせい)の内に見出した。しかし(しか)し(し)こ(こ)う(う)した(した)彼(か)らの「**民衆(みんしゆ)**」なるものは、しばしば「**思想(しゆしゆ)**」か「**実態(じたい)**」という二極(にきよく)分解(ぶんかい)の様相(ようさう)を呈(てい)しており、それは黒田(くろた)俊雄(しゆんしゆう)(一九二六—一九九三)が登場(ていじやう)するまで続く。本(ほん)パネル(パネル)で取り上げ(と)り上げられた(ら)れた(ら)三者(さんしや)もまた、それぞれ(それぞれ)の形(かたち)でこうした傾向(けんきゆう)をよく表現(ひょうげん)していると佐藤(さとう)はまとめた。最後に(さいごに)佐藤(さとう)は、本(ほん)パネル(パネル)の成果(けいこ)は、どのよう(どのよう)にして近代(きんたい)仏教(ぶつこう)研究(けんぎゆ)以外(いがい)の領域(りやうがい)に広(ひろ)げていけるか、という問(と)いを提示(ていし)したのである。

これ(これ)に対して(たいして)代表者(だいひやくしや)のクラウタウ(クラウタウ)は、本(ほん)パネル(パネル)ならび(らび)に企画(けいかく)中の論文集(ろんもんしゆ)は、敗戦(ばいせん)後(ご)に再編成(さいへんせい)された「**普遍性(へんぱんせい)**」の概念(がい念)を理解(りかい)

することに資する点で、戦後日本の思想空間全体を考える基礎とも成り得ると答えた。すなわち「帝国」および「天皇」という存在を前提とした戦時中の日本仏教研究が、敗戦後、如何なる枠組において再構築されていったのかを検討することを通して、仏教以外の分野にも通じる成果を提示できるということである。

また各自の発表に対しても質問がなされ、それぞれが応答した。桐原発表に対しては、服部における三木清理解の妥当性が問われた。これに対し桐原は、服部と三木の親鸞理解にはズレが存在しており、その三木解釈には当時から羽仁五郎などによる批判が存在していたことを指摘し、本発表はあくまで服部の思想であることを付言した。ワルド発表に対しては、『葬式仏教』のみを取り上げることで、圭室の学問全体を語ることが可能かどうか、という質問がなされ、彼は、それが確かに困難である、と答えた。今回は、時間制限のため、あえて、代表作のみに焦点を当てた。圭室による「日本仏教史」そのものを究明することは、今後の課題であるとも述べた。碧海発表に対しては、五来が自己の学問の総称を「仏教民俗学」から「宗教民俗学」へと次第に移行させていったのはなぜか、という質問がなされた。これに対し、五来は仏教よりも庶民信仰の主体性をより重視する傾向が後年になるほど強くなってきたためである、等の応答がなされた。

質疑応答に際しては、フロアからも示唆に富んだコメントや質問が寄せられた。敗戦という体験によっても、学問的な方向性にほとんど変化がみられないような人物をどのように考える

べきか、すなわち本パネルが、断絶という側面を重視する余り、連続性を見逃しているのではないか、という指摘がなされた。さらに本企画が、歴史研究に取り組んだ人物を中心としており、仏教の哲学的考察に取り組んだ者に焦点を当てた場合には、また異なる時代像が見えてくるのではないか——等々である。これらに対してパネリストは、まず日本仏教の語りの中心が仏教学から歴史学へと移行したという構図を示し、さらに敗戦前後において当人の思想自体に大きな変化がないとしても、戦後にその主張が主流になったということから、そこに時代と社会の変容を見ることができるとであろうと質疑を結んだ。

宗教における死生観と超越

代表者・司会 高田信良
コメンテータ 氣多雅子

宗教的信における超越とその構造——諸井慶徳の宗教論——

澤井 義次

今回の研究発表では、天理教学者で宗教学者でもあった諸井慶徳（一九一五—一九六一）が、宗教学的に考察した宗教的信の本質構造を明らかにし、そのうえで死生の意味をめぐる彼の天理教教義学的視座を探究したい。諸井慶徳は奈良県天理市に生まれ、東京帝国大学宗教学宗教学史学科および同大学院に学んだ。後に天理教山名大教会長を務め、天理大学の初代宗教学科